

緑のまきば

1973.No.9

小金井 井 緑 町 教 会
 小金井市緑町四一六―三三
 電話〇四三三一八―一七九六一
 編集 牧師 山本圭一

忍 耐

―患難は忍耐を生み出し、忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を生み出す―(ローマ5章3―4)

山本圭一

I
 中東からの石油輸入がこの頃急に思わしくなくなった。エネルギー資源の乏しいわれわれ日本人にとって、大変困ったことが起ったわけである。もはや誰も「消費は美德だ」とは言わなくなった。反対に節約・我慢・さらに忍耐せよと言いつつ出した。非常な変りようである。

このような外圧的な状況が、われわれに迫ってきたからといって直ちに忍耐できるものではない。むしろ、大きい混乱が起きる。エゴイズムがむき出しになるのが、常である。

歴史にはハブニングがある。予測しがたいことが起る。天地異変はもとより、政治経済、学術文化におよび、病気や死、争いなどハブニングの恐怖はあちこちに秘んでいる。たとい、幸福なハブニングがあっても、われわれの生は決して見通しのたつものではない。不安や焦燥、虚無が人間存在に深くまつわりついてくる。特に歴史

II
 「あなたがたの信仰の働きと、愛の労苦と、わたしたちの主イエス・キリストに対する望みの忍耐とを、わたしたちの父なる神のみまえに、絶えず思い起している」(一テサ1章3)

パウロにとって、テサロニケの教会は、迫害の中で生んだ信仰の子らであった。時に不信を責め、

罪におののき、怒りに燃えた。忍耐は人間パウロの限界ではりさけたに違いない。しかし、キリスト者は、キリストのうちにある希望のもとでしか、行きつまらないうつ、ご自身の力を知らせようと思われつつも、滅びることになつて

救いを深く結びあわせた重みを持つ。そこで「キリストが勝利したもう。」自己の破滅を貫いて、信する世界が「われらの終わり」となる。歴史的現実とは、まさに神と悪魔との葛藤の場であった。

III
 主イエスの同族ユダヤ人は、イエスをキリストとして受け入れようとはしなかった。イエスを拒否することによって、みずから神の怒りの器となった。

器、新約の教会の群れであった。忍耐！ここで歴史を動かす根本が啓示される。ローマ9章22。

「もし、神が怒りをあらわし、かつ、ご自身の力を知らせようと思われつつも、滅びることになつて

「耐えて運ぶ」ことであつた。怒りの器―私が―運ばれている。信する群れに向つて。(ロマ9章23節の冒頭「かつ」この短い日本語

IV
 愛は、従って負い続けて運ぶことだ。愛の労苦こそ忍耐のもう一つの秘密である。自分のことばでしか生きていない者は、忍耐できない。相手のことばを聞き得る知恵を持つ者は、よく忍び耐える。本當の知恵たる愛は忍耐。まことの賢者は忍耐強い。(箴言14章17)

「その目標は」：あわれみの器」
 忍ぶことは、神にとって、怒りの器を憐みの器へと、ひたすらに